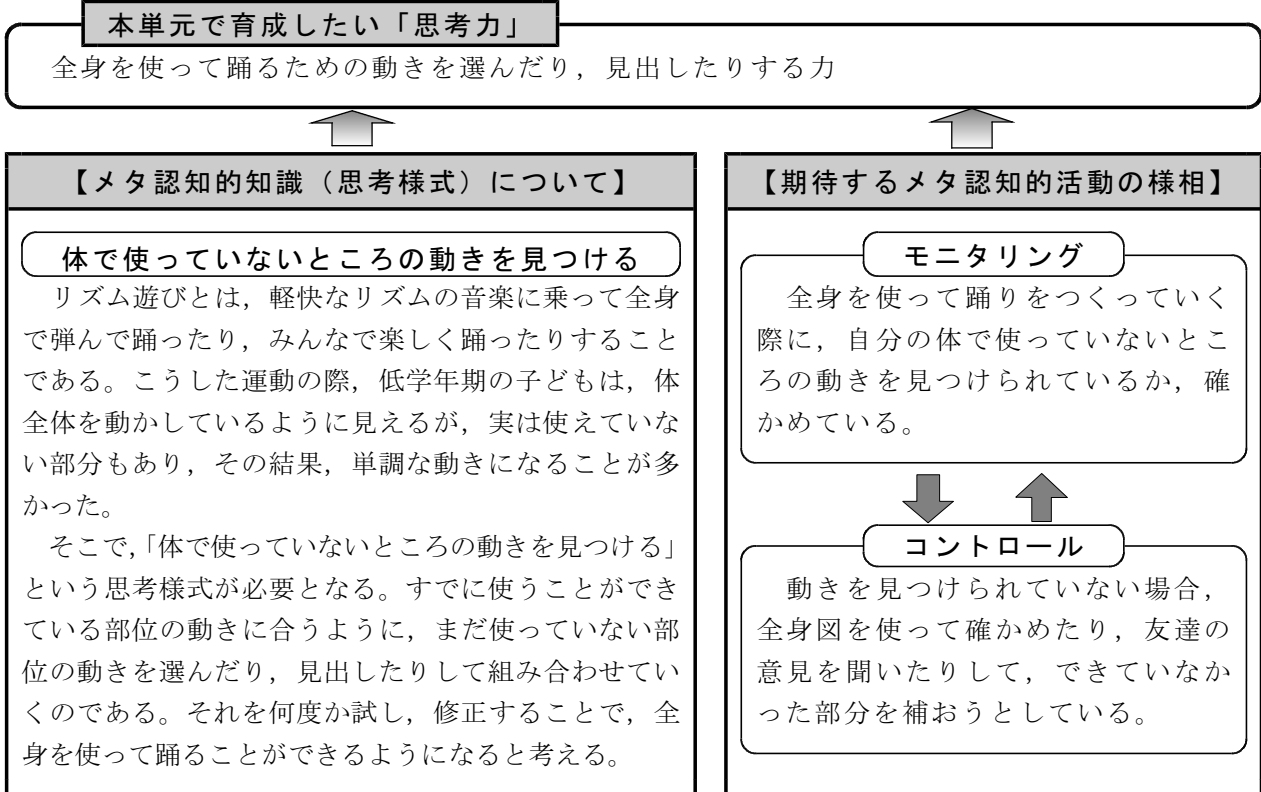


3 思考様式を習得・活用する学習指導の実際

「リズムにのってあそぼう」(第2学年)

(1) 「思考力」育成に向かう思考活動の構造 ～メタ認知からのアプローチ～



(2) 思考活動を促す教材開発

自分の全身図に動きを書き残しながら踊りをつくる学習

○ 思考様式を長期記憶化する側面から

これまで子どもたちは，リズムに乗って踊ったり，友達の踊りを見て踊ったりしていたが，「自分がどんな動きをしたのか」という点については，捉えにくい状態であった。そこで，本実践では踊りをつくる際に，人間の体を型どっただけの簡単な全身図に，動きを書き残していくようにする。まず，単元の前半に，簡単なリズムでどんな動きがあるのかを見つける。ここで，手でできる動き，足でできる動きというように，個々が見つけた動きを集め，学級全体で共有化する。その中で，自分が使おうと考えている部位を実際に動かし，個別に自分の全身図に書き残していく。そして，単元の後半に自分で踊りをつくっていくのだが，その際にも，自分の全身図に動きを書き残していく。このようにして，見つけた動きと全身図を結び付けることで（精緻化），体のどこを使ってどんな動きができていたかが視覚的に残り，全身を使って踊ることができる。このような活動をしていくことで，思考様式を長期記憶化することができると思う。

○ 経験と結ぶための支援

本教材に関する情報を経験と結び付いた状態にするために，踊った後，自分の全身図に動きを書き込み，それを再度，自分で確かめながら振り返っていく。また，友達と踊りを見せ合う際にも，全身図を活用し，音楽に乗って踊っている姿が，全身図に書いた動きになっているかを見せよう。このように，自分が踊っている様子を自分で全身図に書いたり，友達に見てもらったりする活動により，「主観的な情報に客観的な事実を重ねる」という要件を満たすことができると考える。

(3) 単元内で思考様式を習得・活用する過程 (総時数 7 時間)

主な学習活動	ねらう思考様式を習得・活用する過程
<p>● 第一次 (4 時間)</p> <p>体の各部位の動きを見つける</p> <p>簡単なリズムで踊ってみて、足や手、腰や頭等を使った動きを集め、整理する。また、集めた動きを組み合わせて、全身で踊る。</p>	<p>思考様式を習得する段階</p> <p>体の各部位での動きを全体で整理し、その中の動きを組み合わせで自分の全身図に書き込み、実際に踊るようにする。この活動をすることで、体で使っていないところの動きを見つけると全身で踊ることができるということを実感させ、習得をめざす。</p>
<p>● 第二次 (3 時間：本時 2 / 3)</p> <p>音楽に乗って全身で踊る</p> <p>いろいろなリズムの音楽に乗って、自分で動きを選んだり見出したりして、全身で踊る自分の踊りをつくる。</p>	<p>思考様式を習得・活用する段階</p> <p>音楽を聞いて踊りをつくる際、自分の全身図に動きを書き込み、体で使っていないところの動きを見つけているか確認する場を設定する。こうすることで、思考様式を活用しながら、習得することをめざす。</p> <p>思考様式を活用する段階</p> <p>音楽を変えて踊りをつくる場を設定することで、思考様式を活用できるようにする。全身図に動きを書き込みながら、踊りをつくる。全身図を自分で再度見直したり、友達と見せ合ったりしながら、全身を使った踊りをつくっていけるようにする。</p>

(4) メタ認知的活動を取り入れた学習指導の実際

① 子どもの様相を通して ～質的な見取りから～

本時 (第二次 2 / 3) までに、子どもたちは、簡単なリズムに乗って、体のいろいろな部位を動かした。「足は、曲げたりスキップしたりすることができるよ。」「腰は、振ったり回したりできるね。」というように、足や手、腰や頭等を使った動きを集めて、全身図に整理した。また、それらの動きを組み合わせで踊ることで、全身でいろいろな動きができることを実感していった。その後、子どもたちは、いろいろなリズムの音楽に乗って踊っていったが、自分がどんな動きをしたのか、全身が使えて踊れているか、跡に残っていないため確認することはできなかった。

＜体で使っていないところの動きと全身図を結び付ける：「精緻化」に働きかける支援＞

本時は、踊りを自分の全身図に書き残していくようにした。体のどの部位を使って、どんな動きをしたのかを全身図に書いていく。そうすることで、自分の体の使っていない部位が分かる。そして、そこを使ってできる動きを見つけることで、全身を使って踊りをつくっていくことにつなげていった。



見取りを行った 6 名中 4 名が、全身図の全ての部位に動きを書き込むことができていた。この様相からも、見つけた動きと全身図を結び付けて、全身を使って踊りをつくっていくことに意識が向けられていたのではないかと考える。

ここで、習得した以下の思考様式を想起させ、ワークシートに記述させた。

体で使っていないところの動きを見つける

A 児, B 児, C 児, E 児, F 児：
「使っていないところの動きを考える」
D 児：記述無し

抽出児のうち 6 名中 5 名は、思考様式を記述することができた (上記は本時の抽出児の見取り)。その後、子どもたちは、踊りをつくって全身図に動きを書いたものの、実際に踊ってみると、やはり自分の動きが分からない子どもも多く見られた。そこで次のような支援を行った。

モニタリングへの支援：点検基準の設定

全身図を用いながら、自分のつくった踊りを友達に見てもらって確かめる場を設定する。

動きを書いている全身図を確認しながら、踊りを見もらうことで、「全身図には書いているけれど、動かせていないことがあるよ。」「まだ使っていないところがあって、動きを増やせるよ。」ということに気付くことができた。こうした活動により、自分の思考の状態をモニタリングすることが可能になり、思考様式が上手く使えていないと気付いた子どもは再度、全身図の動きを振り返ることができた。



【友達と踊りの見せ合い】

そして、思考様式を改めて自覚できるように、以下のような支援を行った。

コントロールへの支援：修正箇所の特定

友達に見てもらって、動きを書き込めていないことに気付いた場合は、使っていないところの動きを選んで、全身図に書き足すよう促す。

その際の子どもたちの様相は、以下のようなものであった。

- 友達から、全身を使って踊ることができていたと言われてうれしかった（B児、C児、F児）。
- 動きが多すぎて、できていなかった動きがあった（A児）。
- できてない動きがあった。次は、その動きをしたい（E児）。
- 次は、頭と腰を使って踊りたい。わけは、頭と腰が使えていなかったから（D児）。

ほとんどの子どもたちは、思考様式を用いて踊りをつくっていたので、踊った後に友達からも認められ、全身で踊ることができたという喜びを得ることができた。また、動きが見つけられていたものの、実際に踊った結果、実現できていなかった子どもは、次にはその動きができるようにしようという意識が高まった。動きを書き込めていない子どもについては、友達の意見から、再度全身図を見直し、使っていないところの動きを書き足していくことができた。

② 検証データを通して ～量的な見取りから～

本実践の前後でテスト（22点満点）を用いて「思考力」の伸びを検証したところ、平均値で0.85点向上した。この差についてt検定を行ったところ、有意傾向が見られた〔 $t(39)=1.99, P<.10$ 〕。

しかし、思考様式に関して実践直後と1か月後の状態を調べたところ、それぞれの結果に有意差が見られ〔 $t(39)=2.97, P<.01$ 〕、思考様式の把持は、十分でないという結果になった。

③ 考察

リズム遊びは、全身を使って弾んで踊る楽しさが味わえる。全身を使うためには、音楽に乗ってなんとなく体を動かすのではなく、本実践のような思考様式をもち、子どもたちが、意識して体全体の動きを考え、踊りをつくっていくことが大切であると考え。使っていないところの動きと全身図を結び付けながら、課題解決をしていく過程が、「思考力」の伸びにつながったのではないかと考える。

しかし、思考様式の長期把持には課題が残る。1か月後、子どもたちは「一生懸命踊っていることを考える」「いろいろな動きを考える」というような言語で表出し、思考様式である「体の使っていないところの動きを見つける」とは、答えていない者が多かった。こうした結果から、習得している思考様式を子どもたちの言葉で何度も確認する場を設け、意識付ける必要があると考える。さらに、単元を構成した際、思考様式を習得するまでに時間をかけ過ぎ、活用していく場を十分確保することができなかつたことも要因として考えられるので、今後、改善していきたい。